

新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議(第6回)にご出席の委員・オブザーバーの皆さま

金沢大学学校教育系 滝口 圭子

- (1) 全ての教員に求められる特別支援教育に関する専門性
- (2) 特別支援学級や通級による指導を担当する教員に求められる専門性
- (3) 特別支援学校の教員に求められる専門性

教員養成に携わる者として、また巡回相談員として種々の保育、教育施設機関において学ぶ機会をいただいている者として、上記の3項目のうち、特に、(1) 全ての教員に求められる特別支援教育に関する専門性に焦点を当て、以下に列記いたします。可能性としまして、上記の項目(1)に当てはまる(と思われる)事項は、(2) 特別支援学級や通級による指導を担当する教員に求められる専門性、あるいは(3) 特別支援学校の教員に求められる専門性としても、一定の役割を果たし得ることもあるかと思えます。それらを厳密に区別するといった意図はございません。

以下、実践の現場において得られた直観的な事柄を、極めて曖昧な筆致で列記しますこと、予めお詫び申し上げます。更に、本来であれば、以下に列記する事柄を「いつ」「どこで」「誰が」「いかにして保障するのか」という点も視野に入れながら構造化を推進することが望ましいと考えますが、力不足によりそれは叶わず、事項の列記のみとなりますことも、重ねてお詫び申し上げます。

【発達(という概念)のより正しい理解】

- ・個人を発達の各要素に分解して理解するのではなく、あるいはそうした理解を経たとしても、常にあるいは最終的に、それぞれの子どもを一人の総体としてとらえることができる
- ・それぞれの子どもの発達を保障するという姿勢、態度を保持し、維持することができる
- ・発達とは、右肩上がりの直線または曲線を描くものではなく、日々の行ったり来たりを繰り返すものである、「発達を知る」ということは「全ての子どもは、できることもできないことも、丸ごとで意味がある存在であると知る」ことである(滝口, 2018)ということを理解している
- ・目の前の子どもたちは、それぞれ、どのような道筋をたどってここにいるのか、今、どのような状況にあるのか、そして、これからどのように歩みながら自分をつくり、学習を重ねていくのかといったように、子どもたちの来し方行く末を巨視的に見通し、かつ微視的に追究するという姿勢を持つ(滝口, 2019)

【それぞれの子どもを一人の(かけがえのない)存在としてとらえる姿勢、態度】

- ・子どもを一人の人間として、尊重することができる
 - … 子どもにおもねるという意味では全くない、言うは易く行うは難しであるが、より多くの教育職員がそうした姿勢を保持また維持するだけで(極めて乱暴に言えば、特別支援教育に関する知識を十分に持っていなかったとしても)、現在の多くの課題が(少しは)改善するように思われる
- ・「集団の一員としての子ども」ではなく、「一人ひとりがつくる集団」(滝口, 2019)としてとらえることができる
 - … 前者のとらえ方が誤っていないわけではないが、「発達」「支援」「クラス運営」等を視野に入れるならば、後者のとらえ方をより明確に意識することが求められる
 - … 幼児教育や特別支援教育に携わる保育者、教育者は、後者のとらえ方が(比較的)可能であるが、そうではない教育者にとっては困難である(あるいは想像もできない)ように思われる

【必要とされる支援の模索と提供】

- ・発達あるいは障害に関する自身の(頼りない)知識に惑わされることなく、目の前の子どもを見ることができる
- ・自身の一方的なあるいは偏った思い込みを(なるべく)自覚し、(なるべく適切に)排除することができる
- ・知識や情報の更新を怠らない一方で、不変のあるいは普遍の事実を抽出することができる
- ・周囲の他者とやり取りをしながら、より適切な支援方法を模索し続けることができる

【周辺事項】

- ・「専門性」とは、学習等によって身につけることができ、感覚、直観、才能といったような個人の資質(のみ)に還元されるものではない(という理解でよろしいでしょうか)
- ・今後、必要とされる専門性を整理した後に(あるいは整理しながら)、「いつ」「どこで」「誰が」「いかにして保障するのか」という点も視野に入れた議論、構造化が求められる

滝口 圭子(2018). 心身の発達① 発達の基礎的な理論と乳幼児期の発達 田爪 宏二(編著) 教育心理学(pp.20-33) ミネルヴァ書房

滝口 圭子(2019). 就学前後の子どもたち 心理科学研究会(編) 新・育ちあう乳幼児心理学(pp.208-226) 有斐閣